



中央図書館 児童室 (昭和 57 年 9 月 いわき市撮影)

いわき総合図書館 開館 10 周年記念企画展

# いわきの図書館



移動図書館いわき号 (昭和 50 年 5 月 いわき市撮影)



常磐図書館 (昭和 46 年 2 月 いわき市撮影)



文化センター全景 (昭和 50 年 5 月 いわき市撮影)



貸出カウンター (昭和 56 年 10 月 いわき市撮影)



ラトブ全景 (平成 19 年 いわき総合図書館撮影)

いわき市立いわき総合図書館



いわき市平字田町 120 ラトブ 4・5 階

TEL 0246-22-5552

<http://library.city.iwaki.fukushima.jp>

## いわき市立いわき総合図書館 開館 10 周年に寄せて

いわき市文化センターの 4、5 階から、JR いわき 駅前のラトブの 4、5 階に移転し、名称も、いわき市立中央図書館から、いわき市立いわき総合図書館に改め、いわき総合図書館が新たなスタートを切ったのは、平成 19(2007)年 10 月 25 日のことでした。

それから 10 年。今回、大きな節目の年を迎え、企画展「いわきの図書館」を開催し、いわき総合図書館の歩みをはじめ、平、小名浜、勿来、常磐、内郷、四倉、それぞれの地区の図書館の歩みも取り上げ、紹介することといたしました。

ごゆっくり御観覧いただければ、幸いです。

現在、いわき総合図書館には、平日一日で約 2,000 人、土曜や日曜、祝日には一日で 3,000 人弱の利用者の皆様がお越しになっています。

多くの皆様に御利用をいただいておりますことに、あらためて感謝を申し上げます。

頼りになる図書館、身近で、利用しやすい図書館。

これからも、そのような図書館を目指し、日々、励んでまいります。

いわき総合図書館長 夏井 芳 徳

# 待望の「平市公民館図書部」が開館

「いわき総合図書館」の前身となったのは、昭和23（1948）年8月23日に開館した「平市公民館図書部」です。いわき市が発足したのは、昭和41（1966）年10月ですから、当時はまだ平市でした。それまでも、諸橋元三郎の「三猿文庫」をはじめ、「海外協会 佐賢図書館」など、私立図書館・文庫はいくつかありましたが、市立図書館としてはこれが最初となりました。

平市公民館図書部の開館を報じる当時の『いわき民報』（昭和23年8月20日付）には、「閲覧は午前八時から午後三時までで貸出はしない方針」、「予算の関係で目下書籍も月刊雑誌に限られている」とあり、本格的な図書館というよりも、図書コーナーといった規模やサービスでのスタートであったようです。

場所は平市公会堂の2階で、当時、平市公会堂は、平市役所の仮庁舎として使われていました。現在の市文化センター北隣の葬祭場「さがみ典礼 いわき迎賓館」（旧大黒屋デパート跡）が、平市公会堂跡にな

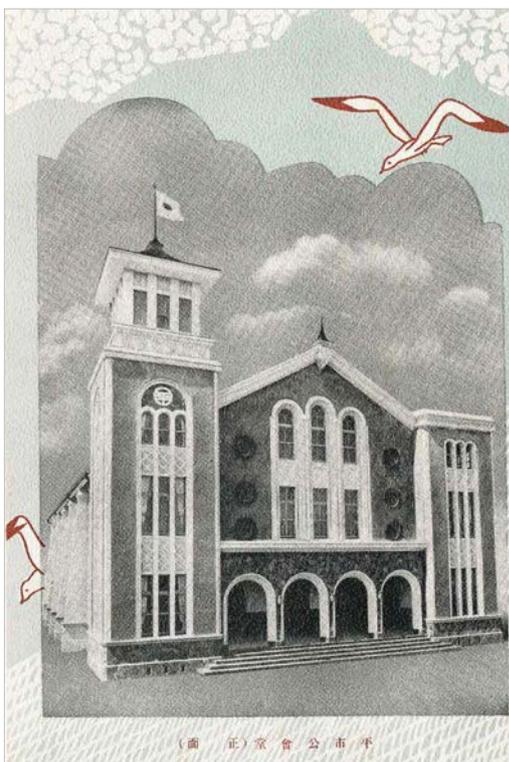
ります。

ちなみに、日本における公共図書館の設置は、明治32（1899）年に「図書館令」が公布されたことで進められます。

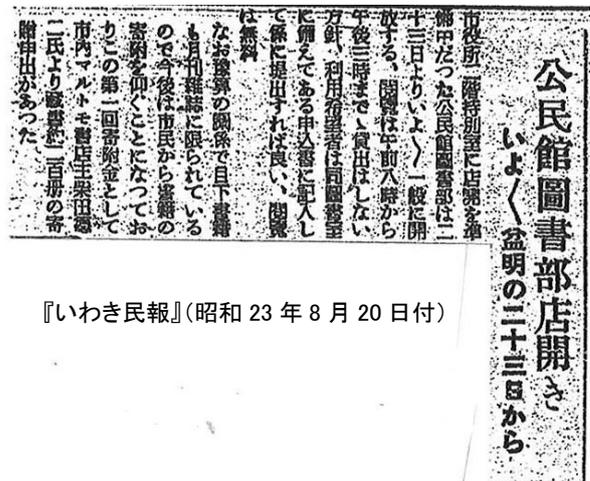
福島県内の図書館で最も古い公立図書館は、明治37（1904）年に開館した会津若松市立会津図書館です。福島市立図書館は明治41（1908）年、福島県立図書館は昭和4（1929）年の開館ですから、いわき地方における公立図書館の設置は、他の地域に比べ遅れたことがわかります。

当時も、図書館建設の声はあがりましたが、実現までには至りませんでした。ですから、市民にとっては待望の図書館開館だったのです。それは、開館後の利用者の増加からも知ることができます。

その後、平遙樋小路の私立平陽女学校跡、平堂根町の市文化センターへの移転を経て、平成19（2007）年10月25日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」の4・5階に、いわき総合図書館が開館しました。



平市公会堂。昭和23年8月、この2階に平市公民館図書部が開館した。（「平市公会堂竣工記念絵葉書」昭和13年）



『いわき民報』（昭和23年8月20日付）



昭和26年頃の平駅前（『平市勢要覧 昭和26年度版』）

# 「平市公民館図書部」から「いわき市立平図書館」へ

平市公民館図書部は、平市公会堂の2階で業務を行っていましたが、昭和27(1952)年4月、平市公会堂隣に平市公民館が建設されたことに伴い公民館内に移転します。

一方、昭和13(1938)年の開館以来“文化の殿堂”として市民に親しまれてきた平市公会堂は、建物の老朽化と接する国道6号の交通量の増加に伴う騒音のため、昭和41(1966)年4月に廃止となってしまいます。同年12月には、平市公会堂の敷地は公民館の敷地も含めて旧大黒屋デパートに売却されました。

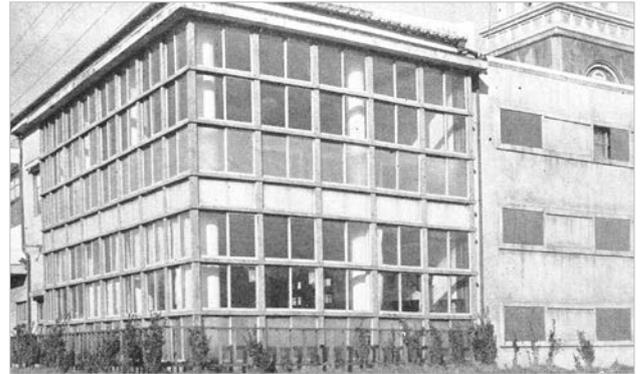
また、昭和41年10月にはいわき市が発足し、名称を「いわき市立平公民館図書部」と変更しました。

旧大黒屋デパートに売却された後も、公民館図書部は移転先が決まるまでのしばらくの間、間借りという形で同地で図書館業務を行っていました。移転先を巡っては、独立型図書館の設置を求める声がありますが、当時のいわき市は合併後の財政難を抱え、新規事業へ着手が困難な状況でした。

とはいえ、社会教育の基盤である公民館がいつまでも間借りという訳にもいかず、昭和43(1968)年7月、市は暫定移転という形で、平搔槌小路にあった私立平陽女学校跡に公民館と図書部を移転することにしました。ここで暫定移転としたのは、将来的には独立公民館と図書館の建築を目指していたからです。

平搔槌小路への移転に伴い、平公民館図書部は独立運営となり、名称を「いわき市立平図書館」と変更しました。当時の蔵書数は2万5,000冊、年間利用者は延べ1万人を超えていました。

なお、平搔槌小路への移転は、独立公民館・図書館の新築までの暫定移転のはずでしたが、新館開館は7年後の昭和50(1975)年5月の市文化センター(平堂根町)のオープンを待たなければなりませんでした。



平市公会堂に隣接していた平市公民館  
(『平市勢要覧 昭和30年度版』)



平市公民館図書部 館内(『平市勢要覧 昭和30年度版』)



『いわき民報』(昭和43年2月1日付)

# 搔槌小路の「いわき市立平図書館」

平図書館の移転先となった私立平陽女学校は、明治38(1905)年3月、私立女子裁縫学校として平町字田町に設立されました。明治39(1906)年4月、私立平陽裁縫女学校と改称します。その後、生徒数の増加で校舎が手狭となったことなどから、大正13(1924)年3月、私立平陽実科女学校へ改称されたのを機に、平図書館の移転先となる常磐線稲荷山トンネル北東側(搔槌小路20番地)に移転改築しました。昭和3(1928)年4月には、文部大臣の認可を受け私立平陽女学校と改称しますが、昭和20(1945)年7月、県立平女子商業学校(現 県立平商業高等学校)に転用する際に廃校となりました。

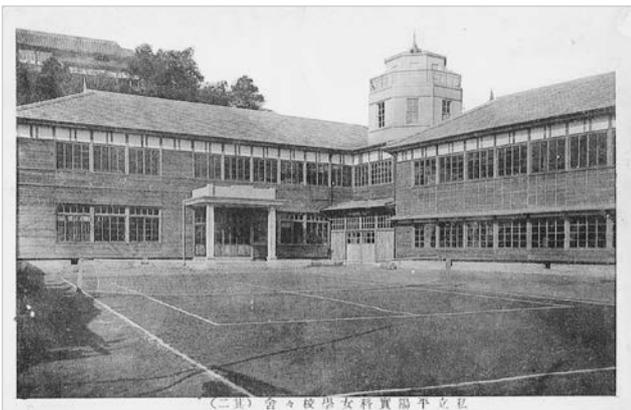
廃校後の校舎は、平女子商業学校が昭和22(1947)年6月まで使用し、その後は、県立平盲ろう学校や、国立平工業高等専門学校(現 福島高専)などが使用していました。また、昭和43(1968)7月に、平公民館、図書館が移転する直前には、火災で校舎が焼失した市立平第二中学校が、仮校舎として使用していました。

図書館は1階で業務を開始し、うち2部屋を書庫に、閲覧室は100㎡あり、移転前の1.5倍となる約60人を収容できるようになりました。

昭和46(1971)年7月には、金曜日と土曜日の開館時間の延長を行い、金曜日は午後4時から午後7時に、土曜日は正午から午後5時に延長し、サービスの拡充を図ります。

同じ頃、公民館利用を促進する動きもあり、平公民館ではサークル活動が急増しました。その結果、施設が手狭になり、市民が思うように利用することができなくなりました。また、当時すでに築50年近く経っていた建物だったため、暖房設備や防火設備の不備なども問題視され、早期の中央公民館建設を求める声が日に日に高まってきました。

そんな折、『いわき民報』(昭和46年7月23日付)のトップ記事で「48年度に着工 こんどは中央公民館 図書館も併設の意向」と報じられます。中央公民館建設が具体的に発表となったのは、これが初めてでした。その後計画が進み、市文化センターが昭和50(1975)年5月2日にオープンしました。建設用地確保の問題や、いわき市合併による財政悪化など、いわきの過渡期にあったことが図書館の移転問題を複雑にし、その結果、平搔槌小路への“暫定移転”から、市文化センター移転まで7年を要したのです。



搔槌小路へ移転した頃の私立平陽女学校。  
図書館は、昭和43年7月から昭和50年3月まで使用していた。(大正13年発行)



私立平陽女学校の跡地は、現在駐車場になっている。(平成26年1月 いわき総合図書館撮影)



『いわき民報』(昭和50年3月19日付)

# 市文化センターオープン 「いわき市立中央図書館」開館へ

市文化センターは、昭和 48 年度から 13 億 8,000 万円をかけて建設され、昭和 50(1975)年 5 月 2 日、待望のオープンとなりました。

地下 1 階、地上 6 階建てで、1 階には 580 席を備えた大ホールを配置。6 階には児童科学館があり、当時としては県内最大規模のプラネタリウム 245 席と天文台を備え、子どもたちの夢を育てる施設として連日、見学者でにぎわいました。

図書館は、4 階に一般書、5 階に児童書を配置しました。また、移転に伴い「いわき市立平図書館」から「いわき市立中央図書館」へ名称を変更し、昭和 50(1975)年 5 月 3 日に開館しました。

開館時の蔵書数は、平図書館の 2 倍以上に当たる 2 万 8,509 冊（うち児童書は 4,115 冊）でしたが、利用に追いつかず、蔵書不足が指摘されました。

開館時間は、月～木・土が午前 9 時から午後 4 時半、金曜日は午前 9 時から午後 7 時までで、休館日は、日曜祝日のほか、毎月 1 回でした。

貸出冊数は 1 人 3 冊、14 日間（それ以前は 1 人 2 冊、10 日間）となりました。

オープン当時のにぎわいを伝える当時の『いわき民報』（昭和 50 年 5 月 12 日付）には、「文化センターに 3 万 4,000 人 9 日間に市民の 1 割」とあり、多くの市民が押し寄せたことがうかがえます。

図書館も、開館 5 日間で 913 人が新規登録し、1,691 冊を貸出しました。平図書館時代の 1 日の平均利用者 30 人、50 冊程度の貸出に比べると、飛躍的な利用増になったのです。

その後も、利用者は日を追うごとに増加しました。特に児童書の貸出が多く、1 ヶ月もすると児童書の約半分の本が貸出され、書架が空いてしまう事態となっていました。本がないため、ガッカリして帰る子どもの姿もあったそうです。

中央図書館時代は、日曜開館の開始、点字・録音

資料の貸出開始、国際資料コーナーの設置、図書館情報システム導入など、サービスの拡大期となりましたが、平成 19(2007)年 10 月 25 日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」への移転に伴い、32 年の歴史に幕を下ろしました。



『広報いわき』(昭和 50 年 4 月 1 日付)



市文化センター落成式(昭和 50 年 5 月 いわき市撮影)



## 中央図書館 日曜開館スタート

市文化センターの中央図書館時代は、図書館サービスの拡大期となりました。

現在では、利用したいときにいつでも開館している図書館ですが、日曜日も開館するようになったのは、昭和 56 (1981) 年 1 月 11 日からで、中央図書館に限定しての実施でした。

中央図書館が開館して間もない頃から、日曜開館を要望する声がありました。当時の『いわき民報』(昭和 54 年 12 月 28 日付) には、いわき市社会教育委員の会議で、日曜開館と開館時間の延長、四倉・久之浜地区への図書館新設などを教育委員会に対し要望したことを報じる記事が見られます。

しかし、日曜開館については、職員配置の問題や、司書の専門職としてのスキル向上の必要があり、先延ばしになっていました。

そんな折、昭和 55 (1980) 年のいわき市議会 6 月定例会において、当時の松本久教育長が、市立図書館 5 館の日曜開館年内実施の方針を明らかにしました。また、同年 7 月 1 日、市は行政機構改革を行い、図書館も日曜開館を想定して職員の増員が図られました。

日曜開館問題に最終的な結論が出たのは、同年のいわき市議会 12 月定例会です。「来年 (昭和 56 年) 1 月から中央図書館の日曜開館を実施することに決定した」と当時の田畑金光市長が答弁したことで、中央図書館に限定して日曜開館を実施することが明らかになりました。

小名浜、勿来、常磐、内郷の地区図書館 (四倉図書館はこの時は未設置) に関しては、「職員数、施設改善問題などからみて現状では無理」としました。地区図書館が日曜開館を開始したのは、12 年後の平成 5 (1993) 年 3 月 1 日のことでした。

市民の念願だった日曜開館の初日は、多くの利用者が詰めかけました。当時の記録によれば、来館者

は 1,141 人、貸出冊数は 1,231 冊と、開館以来最高を記録。勤め人や親子連れなど、平日は利用できない人たちが多く訪れ、熱心に本を選ぶ姿が新聞で報じられました。



『いわき民報』(昭和 56 年 1 月 12 日付)



『いわき民報』(昭和 56 年 1 月 29 日付)

# 図書館情報システムの導入

日曜開館とならび、市立図書館の大きな変化として、「いわき市立図書館情報システム」(以下 システム)の導入があります。

それまでは、手書きのカード目録で本を検索し、貸出・返却もすべて職員が手作業で行っていました。貸出票が見つからない、ということもしばしばあり、返却日もスタンプで1冊1冊手押しでしたから、システムの導入は市立図書館の歴史に残る大事業だったといえます。

市立図書館が、システム導入へ動き始めたのは、平成9(1997)年でした。当時、人口30万人以上の自治体で、貸出などの業務を手作業で行っていたのはいわき市だけで、利用者サービス向上のためにも、システム導入は急務となっていたのです。

システム移行準備のため、平成10(1998)年9月より市内6図書館を順次休館し、平成11(1999)年10月26日、「いわき市立図書館情報システム」が稼働しました。システム導入により、貸出・返却作業も大幅にスピードアップし、貸出冊数も1人3冊から5冊へと増えました。また、それまで本の利用状況などは各図書館がそれぞれ管理していましたが、システム導入により市内6図書館がネットワークで繋がり、他館の利用状況がリアルタイムで把握できるようになったのです。

また、システム稼働に伴い「いわき市立図書館ホームページ」も開設され、いつでも図書館と繋がることできるようになりました。



図書館情報システム稼働式(平成11年10月 いわき市撮影)



『いわき民報』(平成9年5月10日付)



『いわき民報』(平成10年3月18日付)

# 総合型図書館構想 「21世紀の森」から「まちなか」へ

「個」のある図書館、「輪」をつくる図書館」をコンセプトに、中心市街地の賑わい創出の場と期待をうけオープンしたいわき総合図書館ですが、当初は常磐地区の 21 世紀の森公園内に建設される予定でした。

平成 3 (1991) 年 2 月、市は、平、小名浜、常磐の市街地に囲まれた丘陵地に、緑豊かな市民のふれあいの拠点を作る「21 世紀の森整備構想」を策定します。この 21 世紀の森のゾーニングのひとつとして、平成 6 (1994) 年 2 月「文化・交流施設整備地区(文化コア)整備基本構想」が策定され、21 世紀の森整備区域内の文化・交流施設整備地内に「(仮称)いわき市民総合図書館」として整備する方針が打ち出されます。

当時、日本はバブル景気に沸き、地方財政も潤っていました。文化センターの中央図書館が手狭になっており、関係者から新しい独立型図書館の建設要望もあったことから、新図書館の建設機運は盛り上がります。

しかし、バブル崩壊など社会状況の著しい変化をうけ、平成 10 (1998) 年 7 月頃より「文化コア構想」を見直すことになります。また、同じ頃、「中心市街地の活性化に関する法律」(平成 10 年 6 月)が公布され、コンパクトシティや公共施設の市街地への整備などが注目されるようになりました。

少子高齢化の進展、中心市街地の空洞化、景気の長期低迷、市民ニーズの多様化など、社会経済情勢が急激に変化し、特に大規模事業は効率性、事業効果への慎重な配慮が求められるようになっていました。このような社会情勢の変化をうけ、平成 11 (1999) 年 4 月、「文化コア構想」に結論が出され、市民生活に身近な図書館や文化ホールなどは、中心市街地へ整備する方針が示されました。図書館は平一町目周辺への整備が検討されていました。



『いわき民報』(平成 6 年 3 月 30 日付)



『いわき民報』(平成 11 年 4 月 28 日付)



文化・交流施設整備地区イメージ  
 (『いわき市文化・交流施設整備地区基本構想 策定調査報告書』より)

# 「いわき市立いわき総合図書館」オープン

市は平成 11（1999）年 7 月、「いわき市中心市街地まちづくり基本計画」を策定します。この基本計画で、いわき駅周辺地区は都市核のひとつとされており、平成 13（2001）年 1 月には、いわき駅周辺に総合型図書館を整備する方針が示されます。

いわき駅前再開発ビルへの入居が公式に示されたのは、平成 13 年 11 月の「いわき市中心市街地まちづくり協議会」との意見交換会でのことです。さらに、同年のいわき市議会 12 月定例会において、当時の四家啓助市長が行政報告のなかで、「総合型図書館と産業交流拠点施設を、いわき駅前再開発ビルに導入することが最善と判断した」と述べ、市は、翌平成 14 年度から総合型図書館の基本計画の策定を開始します。

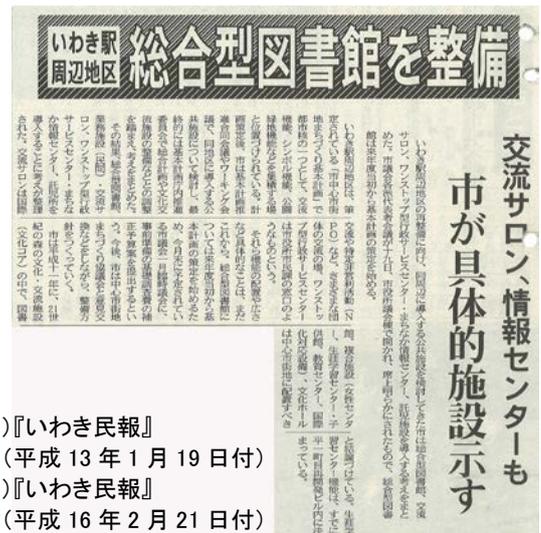
また、平成 13 年 7 月には学識経験者などを構成員とした「いわき市総合型図書館整備検討懇談会」が発足、8 月には図書館司書などを中心としたメンバーを構成員とした「総合型図書館整備検討ワーキンググループ」を庁内に設置し、「いわき駅前地区市街地再開発事業」と連携を図りながら、事業化に向けたフロアレイアウト、蔵書計画、図書館情報システム等に関する検討結果をまとめます。

この時点では、いわき駅前再開発ビルは地下 1 階、地上 14 階の予定でした。このうち、図書館は 4 階から 8 階に配置されることになっており、5 フloor 構成となっていました。

しかし、平成 14（2002）年 4 月のいわき駅前再開発に関する都市計画の決定により、再開発ビルは施設計画の大幅な見直しを行うこととなります。この結果、平成 15（2003）年 11 月には、地上 8 階、地下 2 階の現在の形となります。再開発ビル施設計画の大幅な見直しに伴い、総合型図書館の施設計画も 5 フloor 構成から 2 フloor 構成へ変更するなど、幾度も計画の変更を経て、平成 17（2005）年 4 月、教育

委員会事務局生涯学習課内に「図書館整備検討プロジェクトチーム」を設置します。図書や書架等備品の整備、新図書館情報システム構築・整備、運営体制検討等の供用開始準備に入りました。

平成 19（2007）年 5 月には、「いわき総合図書館」と名称が決まり、7 月には一部業務委託業者の公募を行います。9 月からは新図書館情報システム導入のため市内の全図書館を休館とするなど、総合図書館開館へ向けて一気に加速し、10 月 25 日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」の 4・5 階に開館となりました。平成 6（1994）年に「総合型図書館構想」を打ち出してから、13 年が経過していました。



上)『いわき民報』  
（平成 13 年 1 月 19 日付）  
下)『いわき民報』  
（平成 16 年 2 月 21 日付）



右)ラトブオープン  
（平成 19 年 10 月 25 日 いわき市撮影）

# 東日本大震災発生

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日。金曜日の午後の図書館内には利用者がおり、読書や勉強など、いつもと変わらない時間が流れていました。

午後 2 時 46 分、突然、立ってられないほどの激しい揺れに襲われました。東北地方太平洋沖地震が発生し、いわき市は震度 6 弱を記録しました。館内では、書架から飛び出した本が散乱し、天井からは照明が落下、剥き出しになったコードからは火花が散っていました。

幸い、図書館利用者に怪我はなく、大きな混乱もなく館外に全員避難することができました。

地震発生後、図書館職員は避難所や安否確認窓口などの災害関係支援業務を優先しながら、落下した図書の整理や、破損資料の修理などを行いました。照明がなく暗いなかでの作業でしたが、ボランティアなどの協力もあり復旧作業を進めることができました。

しかし、4 月 11 日夕方に発生した震度 6 弱の余震で、書架に戻した本がすべて落下してしまいます。翌 12 日にも大きな余震があり、3 度目の落下。1 日も早い開館に向けて、復旧作業を進めていた矢先の出来事でした。その後も続く余震のなか、職員は懸

念に復旧作業を進めました。

5 月 2 日、市北部を巡回する移動図書館「いわき号」が運行を再開しました。同じく 5 月 6 日には、市南部を巡回する移動図書館「しおかぜ」も運行を再開しました。

5 月 23 日、市内の図書館でも比較的被害が少なかった勿来、内郷、四倉図書館が再開、5 月 30 日には照明、空調の復旧工事が完了したいわき総合図書館が再開しました。

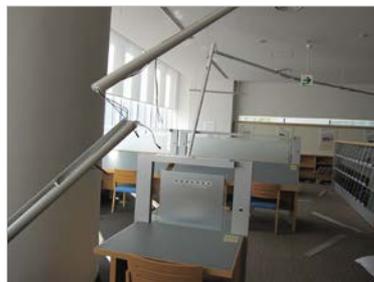
書架の転倒に加え、窓ガラスが破損するなど被害が大きかった小名浜、常磐図書館は 6 月 20 日に再開し、これで市内全ての図書館が再開しました。

震災後は、仮設住宅への移動図書館巡回ステーションの増設、避難者等への利用者登録の拡大、防災などをテーマにした講演会の開催、震災記録の展示など、震災の経験をもとに新たな図書館サービスを展開しています。

また、平成 24 (2012) 年 6 月には、震災資料の収集・保存のため、いわき総合図書館に「東日本大震災いわき市復興ライブラリー」を開設し、震災、原発事故に関する情報を発信しています。



左・下)3 月 11 日直後のいわき総合図書館。本はすべて落下し、書架の一部は転倒、照明もほとんどが落下した。



『福島民報』(平成 23 年 6 月 2 日付)



左) 東日本大震災いわき市復興ライブラリー

# 地区図書館の歴史

## 【小名浜図書館】

「いわき市立小名浜図書館」の前身となったのは、昭和 23 (1948) 年 9 月 1 日に開館した「小名浜町立図書館」です。開館時の蔵書数は 500 冊で、そのほとんどが町民からの寄贈によるものでした。貸出は行わず、1 日 5 円の閲覧料を徴収していました。

その後、小名浜町蛭川新川間に小名浜公民館が完成したことから、昭和 27 (1952) 年 4 月 1 日、「小名浜町立小名浜公民館図書室」となりました。図書室と書庫は、公民館の 2 階にありました。

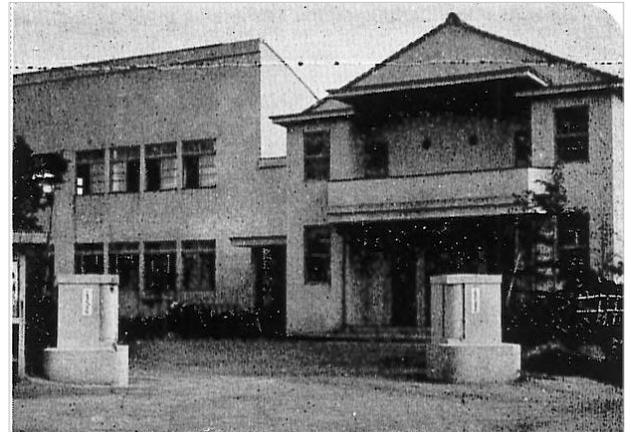
同じ頃、泉町公民館図書室でも、巡回文庫の設置や、蔵書数が 3,000 冊を超えるなど活発な活動を見せていました。

昭和 29 (1954) 年 3 月 31 日、磐城市が発足し「磐城市立小名浜公民館図書室」に名称を変更します。

図書館まで来て本を読む時間のない漁船乗組員に対して貸出移動文庫を設置するなど、港町小名浜らしいユニークな取組も行っていました。(新聞『磐城日日』昭和 30 年 11 月 9 日付)

昭和 41 (1966) 年 10 月 1 日、いわき市が発足し「いわき市立小名浜公民館図書室」に名称変更します。また、昭和 42 (1967) 年 7 月 6 日には、「いわき市立磐城図書館」へ名称変更し、「磐城体育センター」(現 小名浜公民館) の 2 階へ移転しました。

昭和 55 (1980) 年 7 月 1 日には、「いわき市立小名浜図書館」へ名称変更し、現在に至ります。



昭和 27 年に完成した、小名浜公民館(『磐城市勢要覧 昭和 29 年版』)



昭和 40 年頃の小名浜公民館図書室 館内(『磐城 1965』)



小名浜銀座通り(昭和 20 年代 小名浜観光協会)



いわき市立小名浜公民館。  
昭和 42 年 7 月に磐城体育センターとして開設したが、昭和 53 年 4 月に廃止となり、小名浜公民館として全館使用となる。市民プールは体育センターの名残である。(昭和 56 年 10 月 いわき市撮影)

## 【勿来図書館】

勿来地区には、大正 14 (1925) 年 1 月 7 日に錦尋常小学校内に開館した「錦図書館」(大正 15 年 2 月に県知事の認可を受け、いわき地方最初の公立図書館とされている)や、昭和 25 (1950) 年 5 月に植田町役場の応接室に設置された図書室、昭和 27 (1952) 年 8 月に開館した「勿来町公民館図書室」がありました。

しかし、現在の「いわき市立勿来図書館」の前身となるのは、昭和 47 (1972) 年 4 月 1 日に勿来支所 2 階に開館した「勿来図書館」です。

当時市内には平、常磐、内郷、磐城の 4 図書館があり、いずれも旧市時代から引き継がれたものでした。しかし、旧勿来市には図書館がなく、昭和 41 (1966) 年 10 月のいわき市発足以来、勿来地区だけ図書館がない状況でした。そのため、地区住民からの強い要望もあり、勿来支所 2 階の元議長室と議会委員会室を改装し、図書館としたのです。図書購入予算は 75 万円(当時)で、県立図書館の貸出文庫を活用するなどして蔵書を揃えました。

6 年後の昭和 53 (1978) 年 4 月 1 日、新館建設中だった植田公民館が開館したことに伴い、同公民館 3 階へ移転し、現在に至ります。



いわき市立植田公民館。

昭和 24 年に植田町公民館として開設したが、旧植田町役場庁舎を使用していたため老朽化が激しく、昭和 53 年に新築された。(昭和 56 年 10 月 いわき市撮影)



植田町役場庁舎を使用していた、旧植田公民館(昭和 49 年 11 月 いわき市撮影)

**勿来支所に図書館**  
1日開館へ準備急ぐ

地区民待望の勿来図書館が四月一日から新築なつた勿来支所二階で開館する。いわき市内の図書館は平、常磐、内郷、磐城の四カ所だけ、いずれも旧市時代から引き継いだ図書館だが、旧勿来市にはなかったもの。

今年五月、勿来地区だけ図書館のないのは不公平と、書庫を求める地区民がたびたび市に陳情して実現させた。

新設の勿来図書館は二階の元議長室と議会委員会室の四百平方メートルを改装、委員会室の方を事務所と書庫に、議長室の方を図書室としてイス、テーブル五十人分を設けた。

開館の蔵書は、七十五万冊の予算で年内に二冊の新書を購入するが、取れるはず県立図書館からは千五百冊を借りるほか、植田公民館へ蔵書も応援、二千五百冊程度でスタートしたい計画。

なお開館時は土曜日だけ午後五時まで時間を延長、市民の読書熱にこたえる。

『いわき民報』(昭和 47 年 3 月 30 日付)



勿来市役所(現 勿来支所)。昭和 47 年 4 月、2 階の元議長室と議会委員会室を改装し、勿来図書館とした。(『なこそ 勿来市勢要覧 昭報 39 年版』)

## 【常磐図書館】

いわき市合併以前の図書館で、最も活発な図書館活動を見せていたのが、「いわき市立常磐図書館」の前身である「湯本町公民館図書室」です。

湯本町公民館図書室は、昭和 26 (1951) 年 8 月 1 日、湯本町公民館内に開館しました。同年 4 月に落成した湯本町公民館は、総工費 1,200 万円 (当時)、建坪 310 坪、総二階建てで、2,000 人収容可能の公会堂を有するなど、県内でも有数の規模を誇る公民館でした。図書室も 2,000 冊収蔵可能で、閲覧席は 100 名収容できるほどでした。

開館当初は、館外貸出を行っていませんでしたが、昭和 27 (1952) 年 2 月に、①貸出証による無料貸出、②貸出期間は 8 日間、③延滞料を 1 日 2 円とすることを決定します。蔵書は年々増加し、図書室が手狭になってきたこともあり、昭和 28 (1953) 年頃から独立図書館運動が活発になりました。

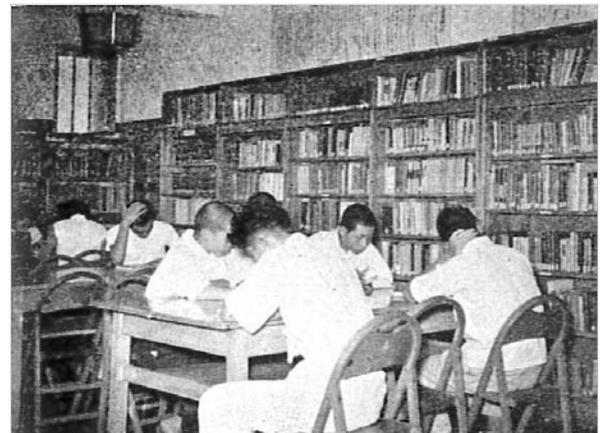
当時の常磐地区は、常磐炭礦株式会社をはじめ、中小の炭鉱が林立しており、炭鉱で働く人々とその家族が多く住んでいました。「炭鉱のまち」の図書館らしく、炭鉱技術や電気関係の図書を充実させ、夜間開館を実施するなど、炭鉱で働く人々が多く利用していました。

昭和 29 (1954) 年 3 月 31 日、常磐市が発足し「常磐市立湯本公民館図書室」に名称変更、昭和 41 (1966) 年 10 月 1 日には、いわき市が発足し「いわき市立常磐公民館図書室」に名称変更しました。

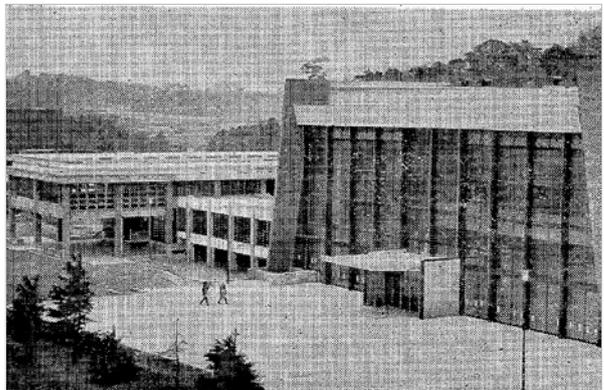
常磐地区では、旧市時代の昭和 40 (1965) 年 5 月から「常磐総合文化センター」(現 常磐市民会館)の建設が始まり、昭和 42 (1967) 年 3 月に完成しました。常磐公民館図書室も同文化センターの 2 階へ移転し、同年 4 月「いわき市立常磐図書館」へ名称変更、現在に至ります。



湯本町公民館(『湯本町勢要覧 昭和 28 年度』)



湯本町公民館図書室 館内(『湯本町勢要覧 昭和 28 年度』)



常磐市民会館(『いわき民報』昭和 43 年 2 月 8 日付)



常磐図書館 館内(昭和 46 年 2 月 いわき市撮影)

## 【内郷図書館】

「いわき市立内郷図書館」の前身となったのは、昭和 24 (1949) 年 11 月 19 日に内郷町役場の元会議室を改装し開館した、「内郷町立図書館」です。開館当初は、蔵書数が少ないため館外貸出は行っておらず、館外貸出を行うようになったのは昭和 28 (1953) 年 9 月からで、14 歳以上に限定しての貸出でした。

昭和 29 (1954) 年 7 月 10 日、内郷市が発足し「内郷市立図書館」に名称変更します。

昭和 34 (1959) 年 11 月、内郷公会堂が完成し、翌 35 (1960) 年 2 月に公会堂 2 階に移転します。当時の蔵書数は、約 7,000 冊でした。

昭和 41 (1966) 年 10 月 1 日には、いわき市が発足し「いわき市立内郷図書館」に名称変更します。

昭和 48 (1973) 年 3 月、いわき市役所新市庁舎(平字梅本 21 番地) が完成したことから、内郷支所の一部機能が平へ移転し、支所の空いたスペースに図書館を充てることになりました。同年 7 月 3 日、内郷支所 3 階に移転したことで、内郷駅からも近くなり、公会堂時代に比べると面積も 1.7 倍広がったことから市民に好評でした。

その後、昭和 55 (1980) 年 4 月、建設中だった内郷公民館が完成したため同公民館 1 階に移転し、現在に至ります。

『磐城新聞』  
(昭和 24 年 11 月 15 日付)



内郷町役場の元会議室を改装し開館した、内郷町立図書館  
(『内郷町勢要覧 昭和 27 年度』)

内郷町では六十萬圓を投じ  
今夏七月來元役場會議室を  
町立圖書館に改造中のところ  
この程完成、常備圖書も  
町民の寄附で三千冊を越え  
たので來る十九日開館する  
ことになった、平屋建三十  
七坪のものである

19 日開館・元役場會議室に  
内郷町立圖書館



内郷公会堂。現在の内郷コミュニティセンターの  
場所にあった。(『内郷町勢要覧 昭和 41 年度』)



内郷公会堂 2 階に移転した内郷市立図書館(『内郷町  
勢要覧 昭和 41 年度』)



昭和 40 年 11 月に完成した内郷市役所庁舎(現 内郷  
支所)。昭和 48 年 7 月、この 3 階に内郷図書館が移転  
した。(昭和 42 年 1 月 いわき市撮影)



昭和 55 年 4 月、内郷公民館 1 階に内郷図書館が移転  
した。(昭和 55 年 3 月 いわき市撮影)

## 【四倉図書館】

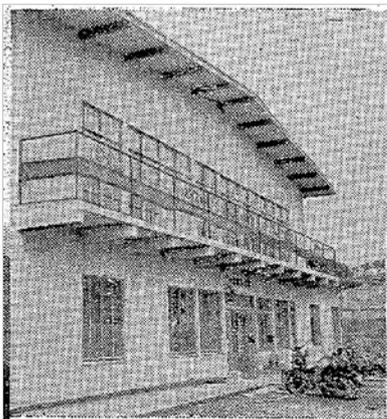
「いわき市立四倉図書館」の前身となったのは、昭和 26（1951）年 3 月 25 日に発足した「四倉公民館図書室」です。

当時、四倉公民館は四倉町役場内にありました。その後、昭和 32（1957）年頃には、四倉町字地引 1 にあった四倉町商工会内に移転します。

昭和 39（1964）年 3 月、四倉町西四丁目 5 に四倉町商工会館が建設されたことから、四倉公民館も同会館に移転しました。しかし、1 年ごとに賃借契約を結んで四倉商工会館の一部を借りている状態であったため、昭和 43（1968）年頃には独立公民館の建設を求める声が高まりました。昭和 46（1971）4 月、独立公民館として現在の四倉公民館が完成し、図書部も公民館内で活動します。

昭和 50 年代には、平、小名浜、勿来、常磐、内郷地区にはすでに市立図書館が設置されていました。しかし、四倉地区は依然として公民館図書室であったことから、地区住民より図書館設置を求める声が高まり、献本運動が広がりました。また、昭和 54（1979）年 12 月のいわき市社会教育委員の会議では、四倉方部への図書館新設が提言されました。

昭和 57（1982）年夏頃より、四倉公民館敷地内に図書館建設が始まり、昭和 58（1983）年 3 月に完成。同年 4 月 1 日、四倉公民館図書部を廃止し、「いわき市立四倉図書館」として 5 月 6 日に開館しました。公民館図書部時代と比べると、面積が約 5 倍となりました。



昭和 39 年 3 月に完成した四倉町商工会館。同会館内に四倉公民館が移転した。（『いわき民報』昭和 39 年 3 月 5 日付）



昭和 46 年 4 月に完成した四倉公民館。図書室は、昭和 58 年 3 月に四倉図書館が完成するまで、公民館の一室で活動していた。（昭和 46 年 4 月 いわき市撮影）



四倉公民館図書室 館内  
（『いわき民報』昭和 51 年 10 月 2 日付）



四倉図書館建設風景（昭和 58 年 3 月 いわき市撮影）



完成した四倉図書館（昭和 58 年 4 月 いわき市撮影）

## 移動図書館の歴史

昭和 41 (1966) 年 10 月、いわき市が発足し、当時としては日本一の面積を有する市が誕生しました。そのため、図書館サービスも広大な市域をカバーする必要が生じ、登場したのが移動図書館です。

現在、いわき市立図書館には、市北部を巡回する「いわき号」と、市南部を巡回する「しおかぜ」の 2 台の移動図書館が運行しています。ステーション数は 119 ヶ所あり (平成 29 年 4 月現在)、月 1 回巡回し、図書館が遠方で足を運ぶことが難しい利用者に本を届けています。

### 「あづま号」から「いわき号」へ

いわき市に初めて登場した移動図書館は、昭和 43 (1968) 年 6 月に福島県立図書館から払い下げとなった「あづま号」(日産 E690 改造 60 年式 積載図書冊数 3,000 冊) でした。当時市内にあった図書館は、平、内郷、常磐、磐城の 4 図書館で、あづま号は、これらの図書館から持ち寄った本 3,200 冊を、公民館を中心に巡回、貸出を行いました。

しかし、県からの払い下げ時には走行距離が既に 8 万キロを超えていたため、昭和 47 (1972) 年 8 月に初代「いわき号」(日産 キャブオール VC240 改造 積載図書冊数 600 冊) を購入し、平図書館に配車しました。当時の大和田弥一市長が「いわき号」と命名した移動図書館は、ブルーとクリーム色のツートンカラーで、山間部の狭い道でも走行できるよう、小回りの利くマイクロバスを図書館用に改造したものでした。

移動図書館の貸出は、当初、団体貸出のみでしたが、同年 9 月、玉川団地をモデル地区として個人貸出をスタートします。これが好評だったことから、翌年の昭和 48 (1973) 年 7 月には 11 ヶ所に増やし、主婦を中心に多く利用されました。



初代いわき号【運行期間 昭和 47 年～昭和 53 年】  
(昭和 50 年 5 月 いわき市撮影)



2 代目いわき号 寄贈式【運行期間 昭和 53 年～昭和 63 年】  
(昭和 53 年 10 月 いわき市撮影)



4 代目いわき号【運行期間 平成 9 年～平成 25 年】  
(平成 10 年 1 月 いわき市撮影)



5 代目いわき号【運行期間 平成 25 年～現在】  
(平成 25 年 12 月 いわき総合図書館撮影)

昭和 53 (1978) 年 10 月、2 代目「いわき号」(トヨタ コースター改造 積載図書冊数 2,400 冊)を、日本中央競馬会競走馬総合研究所の一部寄付を受け購入しました。この時、初代「いわき号」は、須賀川市へ譲渡されました。

昭和 63 (1988) 年 11 月には、3 代目「いわき号」(車種不明 積載図書冊数 2,700 冊)を購入。

平成 9 (1997) 年 12 月には、4 代目「いわき号」(三菱 キャンター 3.5 tトラック改造 積載図書冊数 3,000 冊)を購入します。車体は黄、青、緑の鮮やかな配色で、市の鳥かもめのイメージキャラクター「ミュウ」や塩屋埼灯台が描かれていました。

平成 25 (2013) 年 11 月には、5 代目「いわき号」(三菱ふそう キャンター 4 tトラック改造 積載図書冊数 3,000 冊)を購入。グリーンとクリーム色の車体には、いわき市立図書館キャラクター「かもまる」が描かれ、子どもたちに親しまれています。

### 「しおかぜ」の配車

昭和 47 年 8 月の初代「いわき号」の導入以降、ステーションの増加や積極的な広報活動もあり、利用者は順調に増加しました。昭和 54 (1979) 年 12 月のいわき市社会教育委員の会議では、市の広域性を考慮し移動図書館車の増車が望ましいとされ、昭和 56 (1981) 年 10 月、市の南部を巡回する初代「しおかぜ」(日産 シビリアン GC341 改造 積載図書冊数不明)が、勿来図書館に配車されました。

平成 4 (1992) 年 9 月には、2 代目「しおかぜ」(日産 シビリアン TD42 改造 積載図書冊数不明)を購入。

平成 22 (2010) 年 10 月、3 代目「しおかぜ」(三菱ふそう キャンター 4 tトラック改造 積載図書冊数 3,000 冊)を購入。海をイメージした水色の車体に、市の鳥かもめのイメージキャラクター「ミュウ」が描かれています。



初代しおかぜ【運行期間 昭和 56 年～平成 4 年】  
(昭和 56 年 9 月 いわき市撮影)



2 代目しおかぜ【運行期間 平成 4 年～平成 22 年】  
(平成 22 年 9 月 いわき総合図書館撮影)



3 代目しおかぜ【運行期間 平成 22 年～現在】  
(平成 22 年 10 月 いわき総合図書館撮影)

# 戦前のいわきの図書館

いわき総合図書館の前身は、戦後の昭和 23 (1948) 年 8 月 23 日に開館した「平市公民館図書部」ですが、戦前にも、図書館と呼ばれる施設はありました。

明治後期から大正期にかけ、全国的に青年団などが設立する図書館が急増します。東京はもちろん、地方でも、青年団や教育会などが主体となった、小学校付設の新聞雑誌縦覧所や簡易図書館が生まれ、それにともない図書館の利用者が増えました。

福島県でも、明治 33 (1900) 年に発足した田村郡三春町の「鷹巣青年会附属教育図書館」をはじめ、県内各地に青年団を中心とした図書館が多くつくられるようになりました。

戦前のいわきでも、青年団や篤志家によって図書館がつけられましたが、その活動についてはほとんど記録が残っていません。

## 【私立平図書館】

平町では、平町青年会が設立した「私立平図書館」が、大正 4 (1915) 年 12 月 26 日に平第一尋常高等小学校内 (現 平第一小学校) に開館しました。公立の認可は受けておらず、私立図書館として運営していました。

しかし、この私立平図書館について、当時の『常磐毎日新聞』(大正 14 年 1 月 15 日付) では、「地の

利を得ていないのと蔵書の僅少との點 (てん) に於て殆んど有名無實である」と報じています。

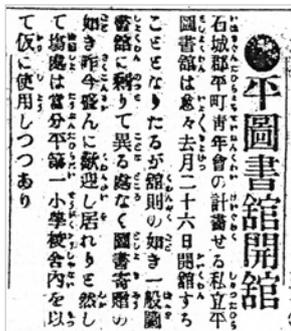
『福島県立図書館要覧 昭和 9 年』によれば、私立平図書館の年間閲覧者数は 43 人、蔵書数は 653 冊という記録が残っています。昭和 3 (1928) 年当時、平町の現住人口は 26,289 人でしたから (注 1)、町民にほとんど利用されていなかったことがわかります。

明治から大正、昭和にかけ、電気、電話、鉄道、上水道などの都市基盤が整備され、急速に近代化が進んだ平町ですが、文化施設といえば交通の便が悪く、蔵書も少なかった私立平図書館だけでした。

そのため、公立図書館設置を求める声は、次第に高まります。図書館建設論は新聞でもたびたび報じられ、これに便乗した詐欺事件まで起きてしまうのです。

私立平図書館のその後について、定かではありませんが、現存する『福島県立図書館要覧』の「県内図書館一覧」によれば、昭和 16 (1941) 年頃まで存在していたことが確認できます。

昭和 16 年 12 月には太平洋戦争が始まり、戦争が激化するなか、昭和 20 (1945) 年 7 月には平第一小学校の校舎が爆撃を受け、多数の死傷者を出しました。このような戦時下の混乱のなか、私立平図書館



『福島新聞』(大正 5 年 1 月 12 日付)

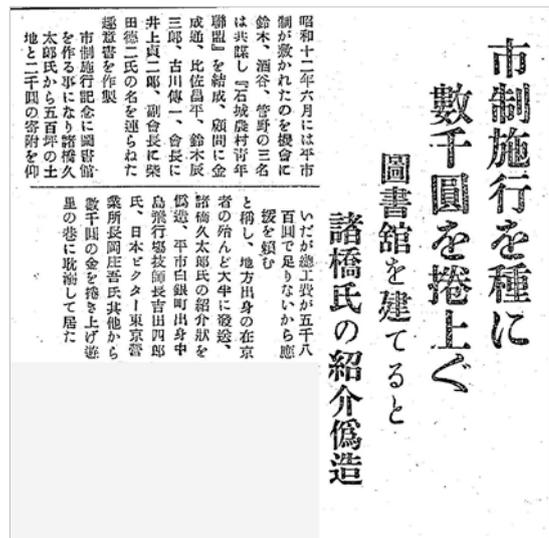
**平に図書館が欲しい**  
町民の教養が欠けて居る  
有志の町勢側面觀

近年平町は異常なる發達をなし當に市としての資格を具備せんとしつゝ、平町の側面を觀察し居る某有志は語る『平町は近來異常に外面的に發達して來た事は認められるが實際に於ける智育徳育方面の町民教育が他町よりも薄いのではな

いかと感ぜられる即ち此の大平町にして一つの整つた図書館の無きは實に遺憾である、平第一小学校に平図書館はある様であるが地の利を得ていないのと蔵書の僅少との點に於て殆んど有名無實であるこ

れは宜しく町費の一部出資と町内の有志を仰げば可能な整つた図書館をつくる事は易々たる事であらうと

『常磐毎日新聞』(大正 14 年 1 月 15 日付)



図書館建設に便乗し、詐欺事件まで起きてしまった。(『常磐毎日新聞』昭和 14 年 3 月 23 日付)

は自然消滅したものと思われます。

なお、市民待望の市立図書館設置は、昭和 23 年 8 月の「平市公民館図書部」の開館を待たなければなりませんでした。

注 1) 『平町勢一斑』(山崎活版所 1928) より

### 【公立錦図書館】

大正 14 (1925) 年 1 月 7 日には、錦尋常小学校内に「錦図書館」が開館しました。錦図書館は、大正 15 (1926) 年 2 月 3 日に県知事の認可を受け、いわき地方最初の公立図書館とされています。

文化施設が乏しかった錦村では、かねてより図書館を設置し、児童や村民の教養を高めたいと考えていましたが、資金不足のため実現できませんでした。そんな折、大正 12 (1923) 年 1 月、錦村青年団員 216 人が 15 日間にわたって常磐線の鮫川鉄橋複線化工事に従事します。これで得た 270 円を基本金に、念願の図書館を開設することができたのです。

新聞『新しいはき』(大正 15 年 6 月 15 日付) には、「錦図書館現況」が掲載されており、蔵書数は 1,800 冊で、館長に荒井一二校長が就いていることなどが報じられています。

また、同小学校出身の星一(注 1) や、錦村長などを務めた金成通(注 2) からも寄付金や図書を贈り、地域の文化振興に寄与しています。

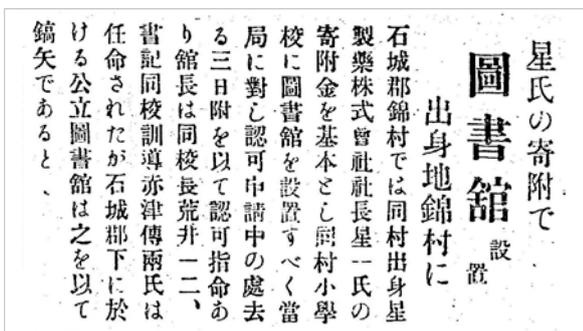
錦図書館のその後について、定かではありませんが、『福島県立図書館要覧』によれば、昭和 16 (1941) 年頃までは存在していたことが確認できます。

注 1) 現在のいわき市錦町出身。明治 39 (1906) 年、星製薬所を設立し、医薬品の国産化に成功。国内初のチェーン店方式で拡大し、“日本の製薬王”と称された。実業家のかたわら、国会議員も務めた。長男は、作家の星新一。

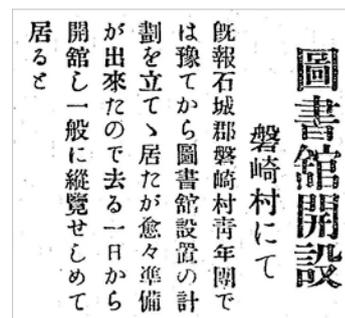
注 2) 福島県議会議員、錦村長、国会議員などを務めた。政治家として活動するかたわら、植田水力電気株式会社の代表取締役などを務め、地域の活性化に尽力した。

### 【磐崎図書館】

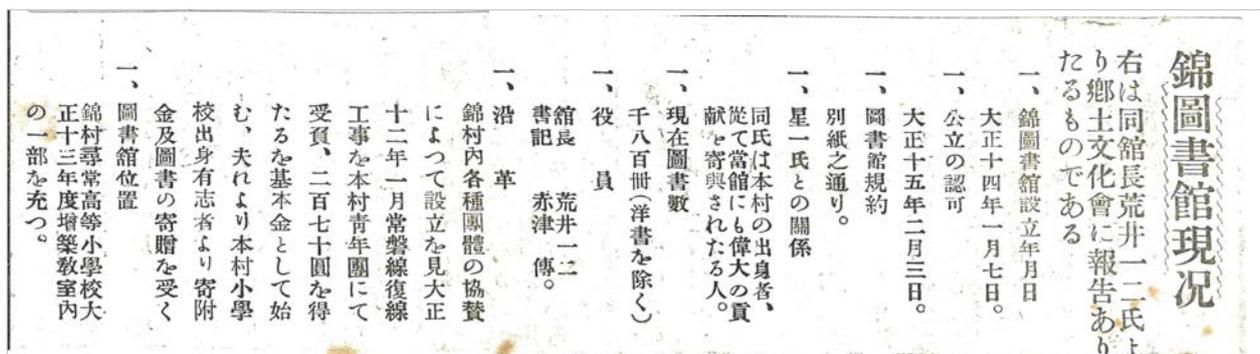
磐崎村では、大正 14 年 2 月 1 日に、磐崎村青年団による図書館が、磐崎尋常小学校内に設置されました。名前に「図書館」とありますが、敬老会や活動写真会を催すなど、地域の娯楽の場となっていたようです。



『常磐毎日新聞』(大正 15 年 2 月 13 日付)



『常磐毎日新聞』(大正 14 年 2 月 6 日付)



『新しいはき』(大正 15 年 6 月 15 日付)

**【私立磐城裁縫女学校図書館】**

新聞『磐城自治新報』(昭和3年11月1日付)では、湯本町の磐城裁縫女学校に私立図書館が計画中であることが報じられています。

昭和3(1928)年から4(1929)年にかけては、昭和天皇の即位を祝う御大典記念事業が全国各地で執り行われました。磐城裁縫女学校図書館も、校長の高木芳太郎が御大典記念事業として計画したもので、自身の蔵書450冊と寄贈本100冊をもとに、校内に図書館設置を計画したようです。

**【衣笠文庫】**

昭和4(1929)年4月29日、泉村玉露に図書館が開館しました。隣村の渡邊村出身で、東京の神田神保町で出版業「山海堂」を営む来島正時くるしままさときが、図書館兼公会堂を4千円で建設し、泉村青年団に寄贈しました。

来島は、安政6(1859)年の生まれで、旧泉藩士です。明治維新後、福沢諭吉の門下で学び、新聞記者を経て、明治29(1896)年、山海堂を創業しました。山海堂は、中学教科書、学習参考書を多く出版

し、同郷の小野圭次郎(現 常磐下船尾町出身)の英語参考書で大きく発展します。この“小野圭の英語”は総発行部数が数百万部ともいわれ、空前の大ヒットとなりました。

元福島県立図書館長で、市民団体「いわきの図書館を大きくする会」の会長を務めた鈴木一は、「私の図書館像」(『うえいぶ』第2号所収)のなかで、この図書館について次のように記しています。

【昭和の初めころ、私の生まれた旧泉村に小さい図書館があった。衣笠文庫の看板が掲げてあった。泉藩の儒者・教育者であった衣笠真・弘兄弟の功徳を顕彰するため、隣村出身の来島正時氏が創立したものであった。】

「衣笠文庫」と名付けられた図書館には、大人向けの読み物が3,000冊位と、新刊雑誌が数種置かれ、おばあさんの管理人がいたそうです。

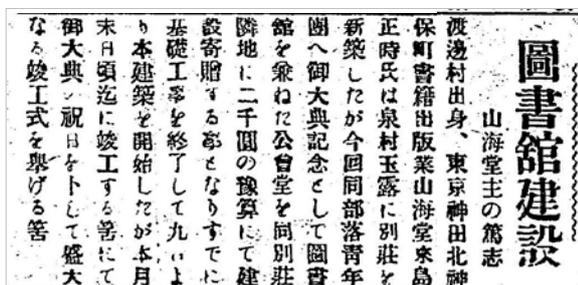
衣笠文庫は、戦前に設立された他の図書館と同様、戦後の混乱で姿を消してしまいましたが、後にいわき市の図書館市民運動の中心となった鈴木氏の“図書館の原風景”となっているのです。



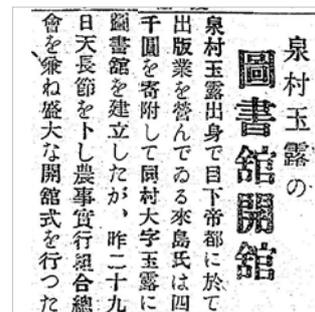
『磐城自治新報』(昭和3年11月1日付)



衣笠文庫 外観(『泉の風土と歴史』岡部泰寿 より) 同書には、衣笠文庫の創設は大正12年とあるが、新聞などの記録では昭和4年となっている。



『磐城新聞』(昭和3年10月11日付)



『磐城時報』(昭和4年5月1日付)

# お城山の図書館「海外協会佑賢図書館」

JR いわき駅北側には、江戸時代、磐城平藩の初代藩主、鳥居忠政が築城した磐城平城の本丸跡地があります。

本丸跡地がある旧城跡のあたりを、地元の人「お城山」と呼んでいますが、このお城山に図書館があったことはあまり知られていません。

その図書館は、「海外協会佑賢図書館」といい、私立磐城佑賢学舎の設立者である大和田豊吉の蔵書をもとに、昭和 21 (1946) 年 9 月 1 日に開館しました。

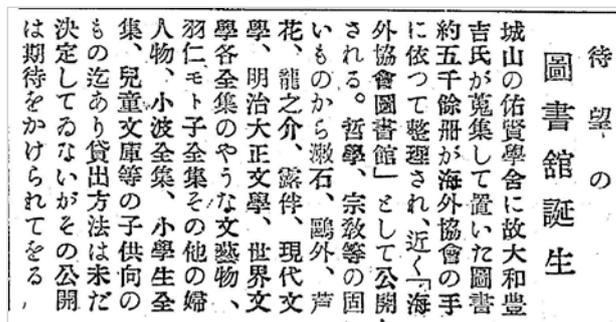
新聞『磐城春秋』(昭和 21 年 9 月 7 日付)には「九月一日開館 海外協会佑賢図書館」、『いわき民報』(同年 9 月 10 日付)には「亡父の遺志を継いで 佑賢図書館の生まれ出るまで」とあり、各紙が開館を伝えました。平市公民館図書部が開館したのは昭和 23 (1948) 年 8 月ですから、市立図書館に先駆けての開館だったのです。

私立磐城佑賢学舎は、大正 2 (1913) 年に開校した石城郡初の教員養成機関でした。昭和 19 (1944) 年 3 月に廃校となるまでの 32 年間に 4 千人以上の卒業生を送り出します。大正 12 (1923) 年に新築された平町旧城跡六間門 20 番地の校舎には「書籍室」があり、蔵書が天井近くにまであったそうです。学舎長の大和田は早くから郡立図書館を提唱し、図書館の必要性を訴えていました。

いわき地方に図書館がない時代、図書館建設の声はたびたびあがりました。その度、話題に上がったのは諸橋元三郎の「三猿文庫」と、大和田の磐城佑賢学舎の「書籍室」だったそうで、このことから蔵書の充実ぶりがうかがえます。

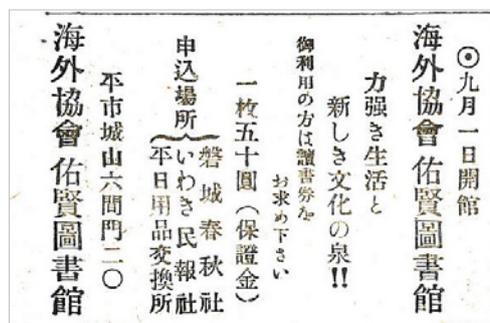
大和田は、昭和 12 (1937) 年 4 月 11 日、70 歳で亡くなり、磐城佑賢学舎は昭和 19 (1944) 年 3 月に廃校となりました。

廃校となった磐城佑賢学舎の書籍室には、多くの



文中「大和豊吉」とあるのは「大和田豊吉」の誤り。

『磐城春秋』(昭和 21 年 6 月 15 日付)



利用者は読書券を 1 枚 50 円で購入した。ちなみに、昭和 21 年の公務員初任給は月額 540 円である。(出典『値段史年表』)

『磐城春秋』(昭和 21 年 9 月 7 日付)



上・右) 平町旧城跡六間門 20 番地にあった磐城佑賢学舎の校舎(いわき総合図書館所蔵)

本が残されていました。残っている目録によれば、「教訓・教育」「文学」「歴史・伝記」「地理・紀行」「理科・数学」「生理・衛生」「法制・経済」「実業」の各分野を取り揃えていたようです。

書籍室に残された蔵書数は不明ですが、1万冊とも2万冊とも伝えられており、膨大な数の蔵書があったことがうかがえます。

この蔵書をもとに、図書館建設を切望していた大和田の遺志を継いだ海外協会（注1）の志賀哉が、図書館開館に向けて蔵書の整理を行い、昭和21年9月1日、待望の「海外協会佑賢図書館」が開館しました。

図書館利用者は、磐城春秋社、いわき民報社、平日用品交換所の各所で、一枚50円で読書券を購入する必要がありました。購入代金は保証金としていたようです。昭和25（1950）年に「図書館法」が成立するまでは、公立図書館でも入館料を徴収し、貸出しにも料金や保証金を徴収していました。佑賢図書館もこれに倣ったものと思われる。

また、海外協会は出版事業も行っており、昭和26（1951）年には『岩城史』（高萩精玄）、同28（1953）年には『日本の年中行事 磐城篇』（岩崎敏夫）を出版しています。しかし、奥付にある発行所は「海外協会図書館」となっており、「佑賢」の文字は消えていました。所在地も「平市鍛冶町6」とあることから、磐城佑賢学舎があった旧城跡からは移転したようです。

海外協会図書館のその後について、詳しいことは分かっていません。残念ながら、大和田が収集した膨大な数の蔵書は散逸してしまいましたが、石城郡に図書館がなかった明治35（1902）年、公立図書館設置の必要性を声高に説いた大和田の遺志は、後のいわき地方の図書館建設に大きな足跡を残したことは間違いありません。

注1）海外協会とは、海外に移住者を多く送り出し

ていた県などで、海外思想の普及、移住者のバックアップなどを目的として生まれた非営利の民間団体。



『磐城春秋』(昭和21年9月7日付)



『いわき民報』(昭和21年9月10日付)

## >>> 参 考 資 料 <<<

- ◆ 『いわき市の図書館 平成 29 年度』いわき総合図書館 2017 (K/016/イ-2017)
- ◆ 『いわき市教育ガイドブック 平成 29 年度版』いわき市教育委員会 2017 (K/370/イ-2017)
- ◆ 『いわき市史 第 6 巻 文化』いわき市 1978 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『福島県教育史 第 1 巻』福島県教育委員会 1972 (K/372/7)
- ◆ 『福島県教育史 第 2 巻』福島県教育委員会 1973 (K/372/7)
- ◆ 『福島県教育史 第 3 巻』福島県教育委員会 1973 (K/372/7)
  
- ◆ 『いわき市文化・交流施設整備地区基本構想策定調査報告書』トデック 1994 (K/318.7/ト)
- ◆ 『(仮称) いわき市立総合型図書館基礎調査報告書』丸善 2001 (K/012/イ)
- ◆ 『いわき市総合型図書館整備に関する提言』いわき市総合型図書館整備検討懇談会 2002 (K/011/イ)
- ◆ 『いわき市総合型図書館整備基本構想・基本計画』いわき市 2002 (K/011/イ)
- ◆ 『いわき市総合型図書館事業化調査報告書』生活構造研究所 2003 (K/011/イ)
- ◆ 『いわき市総合型図書館施設計画・運営計画調査報告書』生活構造研究所 2004 (K/011/イ)
  
- ◆ 『福島県立図書館 30 年史』福島県立図書館 1958 (K/016/7)
- ◆ 『福島県立図書館 50 年誌』福島県立図書館 1980 (K/016/7)
- ◆ 『福島県立図書館要覧 昭和 9 年』福島県立図書館
- ◆ 『近代日本図書館の歩み 本篇』日本図書館協会 1993 (SS/ 010/キ)
- ◆ 『近代日本図書館の歩み 地方篇』日本図書館協会 1992
- ◆ 『公共図書館サービス・運動の歴史 1』日本図書館協会 2006
- ◆ 『公共図書館サービス・運動の歴史 2』日本図書館協会 2006
  
- ◆ 『未来への翼』いわき市 1997 (K/318.2/イ)
- ◆ 『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』いわき市 2016 (K/318.2/イ)
- ◆ 『いわき市の合併と都市機能の変遷』いわき未来づくりセンター 2004 (K/318.2/イ)
- ◆ 『絵はがきの中の「いわき」』いわき未来づくりセンター 2009 (K/210.6-1/イ)
- ◆ 『y a n y a n ステーションビルH I S T O R Y』いわき中央ステーションビル 2008 (K/672/イ)
- ◆ 『「ラトブ」開業までのあゆみ』いわき駅前地区市街地再開発組合 2009 (K/318.7/イ)
  
- ◆ 『うえいぶ 第 2 号』いわき地域学会 1988 (K/051/ウ)
- ◆ 『泉の風土と歴史』岡部泰寿 1983 (K/210.1-1/ウ)
- ◆ 「ふくしま人 大和田豊吉」小野浩(『福島民報』平成 25 (2013) 年 3・4 月連載)
- ◆ 『海を渡った日本人』岡部牧夫 山川出版社 2002 (334.5/ウ)
- ◆ 『広報いわき』いわき市
- ◆ 『いわき民報』いわき民報社
- ◆ 『福島民報』福島民報社



平成 29(2017)年 11 月 6 日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館

いわき総合図書館 開館 10 周年記念企画展「いわきの図書館」

■会期 平成 29(2017)年 11 月 6 日(月)ー平成 30(2018)年 5 月 27 日(日)

■会場 いわき総合図書館 5 階 企画展示コーナー